

孤独な色の後始末

鈴木優花

最寄りのバス停、朝の光が反射する手元の画面を眺めながら、片耳だけイヤホンをつける。

どうしてこんなにも重たいの。

重いから、愛なのか。

歳をとればとるほど、何をするにも理由をつけるようになっていた。たった数言、自分の感情を口にすることすら躊躇ってしまう。二文字が紡げない。

我儘を言わないで、聞き分けよく、大人しく。大人らしい顔をしていて欲しい。自分の中の、幼い子どもに言い聞かせている。固定観念に呪われて、纏わりついて離れてくれない。

こんな大人になりたかったわけじゃないんだって。

出会った瞬間、頭の中がスパークした。景色がピンクに染まった。私の心を支配した感情を、勢いのまま言葉にしたかった。人生最大レベルの衝撃を隠そうと平静を装って、気色の悪い笑顔を作った。この感情のままに行動したら、何を手に入れて何を失うのか、天秤にかけて、目の前を覆ったのは、すべて現実。

渴望するほどのエネルギーを持ち合わせていなかった。身体を維持することに精一杯で。そうやって理由をつけていないと、気がつけば跡形もなく崩れ落ちてしまいうさだから。刺激を求めている癖に、いざそれが手の届く場所に現れた時、無意識に手のひらを返す。